アートプロジェクト

記憶の地図

archive

アートプロジェクト

記憶の地図

archive

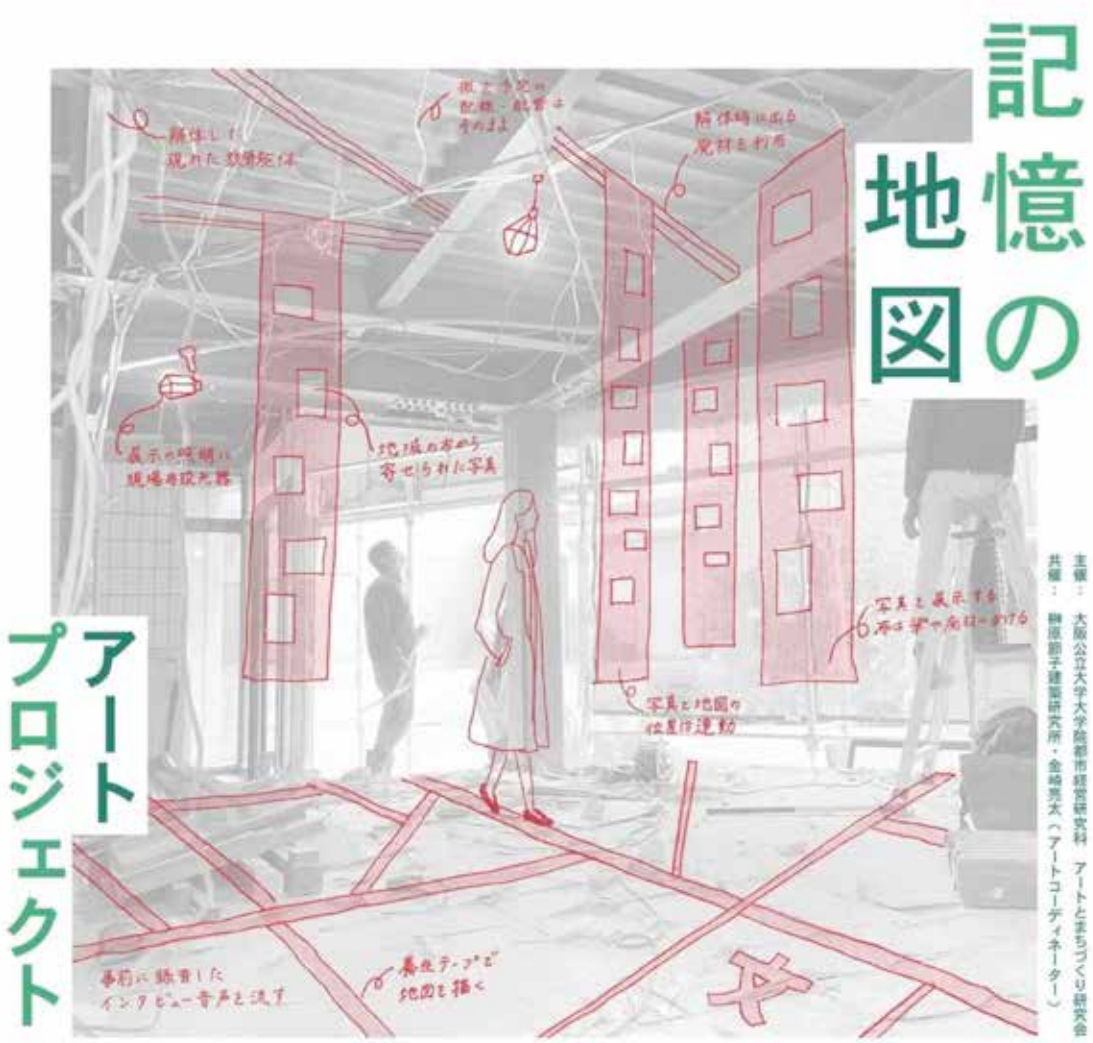
「記憶の地図」アートプロジェクトは、大阪公立大学大学院都市経営研究科の授業のひとつである「アートプロジェクト論」の一環として、受講する社会人学生一同で実施した。

会場となったのは、大阪市福島区野田にある改修中のひとつの住宅である。野田界隈は大阪市中央卸売市場が近く、大阪の食文化や戦前からの長屋が多く残っている。この住宅は約40年前に建てられ街とともに時間を刻んできた。今回新たな住まい手が移り住むにあたり、改修中という機会を利用して、地域の人たちと街の記憶を共有することを目指した。

具体的には、床に街の地図を描き、その場所と連動するように事前に地域の人から寄せられた写真を展示した。集まった写真はかつての長屋や屋敷、中央卸売市場など街の風景に加え、婚礼の輿入れ、路地で遊ぶ子どもたち、賑わう夏祭りなど、日々の暮らしをとどめたものも多く、人々の営みの積み重ねが街をかたちづくっていることが、あらためて感じられた。

訪れた方は、地図の上を歩き、多くの写真をながめながら記憶をたどる。開催の２日間、始終来訪者で賑わい、懐かしい写真を手に取りながら話し込む様子、家族で訪れ子どもに伝える姿も見られ、充実した内容となった。開催にあたっては、町内会長をはじめ色々な方から多大な協力をいただき、私たち学生だけでなく地域の方と一緒につくりあげたプロジェクトとなった。

会場風景



開催日時	＿＿	令和5年3月11日（土）12日（日）両日とも11時～17時
来訪者数	＿＿	２日間計　約330人
写真	＿＿＿＿	地域の人からの写真　約170枚、展示写真 約140枚
主催	＿＿＿＿	大阪公立大学大学院都市経営研究科 アートとまちづくり研究会
共催	＿＿＿＿	榊原節子建築研究所、金崎亮太（アートコーディネーター）
後援	＿＿＿＿	大阪市福島区

令和４年12月末	「記憶の地図」アートプロジェクトの実施決定
令和５年1月	授業内でワークショップを行い、展示方法や役割分担を取り決め
1月末	福島区役所に相談、野田地域の連絡窓口に繋いでもらう
	野田連合町内会で、プロジェクト告知と写真提供のチラシ回覧を依頼
2月～	野田の各町内会にて回覧板と掲示板にて、住民にお知らせ
2月８日(水)	大学広報課よりプレスリリース
2月18日(土) 23日(祝) 25日(土)	現場にて写真集め、随時メールでも写真受付
3月1日	福島区「広報ふくしま」に掲載
3月6日(月)～	現場にて設営
3月9日(木)	読売新聞朝刊地域版にて掲載
3月11日(土)12日(日)	2日間にわたり開催

2023年(令和5年)3月9日(木曜日)

大阪の下町 営みに迫る

大阪市福島区野田にある築約80年の民家で11、12両日午前11時～午後5時、戦後以降に地元で撮影された写真や思い出を展示し、都市とそこに暮らす人々の営みに迫るアートイベント「記憶の地図」が開かれる。主催者は「地元だけでなく、多くの人に大阪の下町の良さを知ってほしい」と呼びかけている。

大阪公立大大学院都市経営研究科で、アート・芸術活動と地域の活性化などの関わりについて学ぶ学生ら約10人が企画した。都市経営研究科は大阪都市圏の都市の課題解決に取り組む人材育成を図る社会人向けの大学院。

イベントの狙いは、時代によって変化する街と、住民たちの思い出を通して、「都市と暮らし」にとって何が大切かを探ること。昔ながらの長屋の取り壊しと新しいマンションの建設が相次ぐ野田地域を舞台に選び、地域住民に思い出の写真の提供を呼びかけると、約200枚の写真が寄せられた。

「嫁入り」の思い出を収めた写真や、台風で損壊した様子を記録した写真もあった。会場は、築80年以上の民家を改修したシェアハウス「福島区野田2の10の6」で、学生たちは実際に野田地域の施設を巡り、撮影場所に合わせて写真をパネルに仕立て展示する。

野田地域は、大阪駅に近い立地の良さから、急速に再開発が進んでいる地元町内会の鈴木和美会長(71)は「街並みが変わるのはさみしいが、地元以外の人に野田に関心を持ってもらえるのはうれしい」と話した。考案した学生で1級建築士の樋原瑞子さん(32)は「街歩きを少しでもゆっくりという気持ちが生まれるきっかけになれば」と期待する。

11、12日福島・野田 アート展 写真・思い出

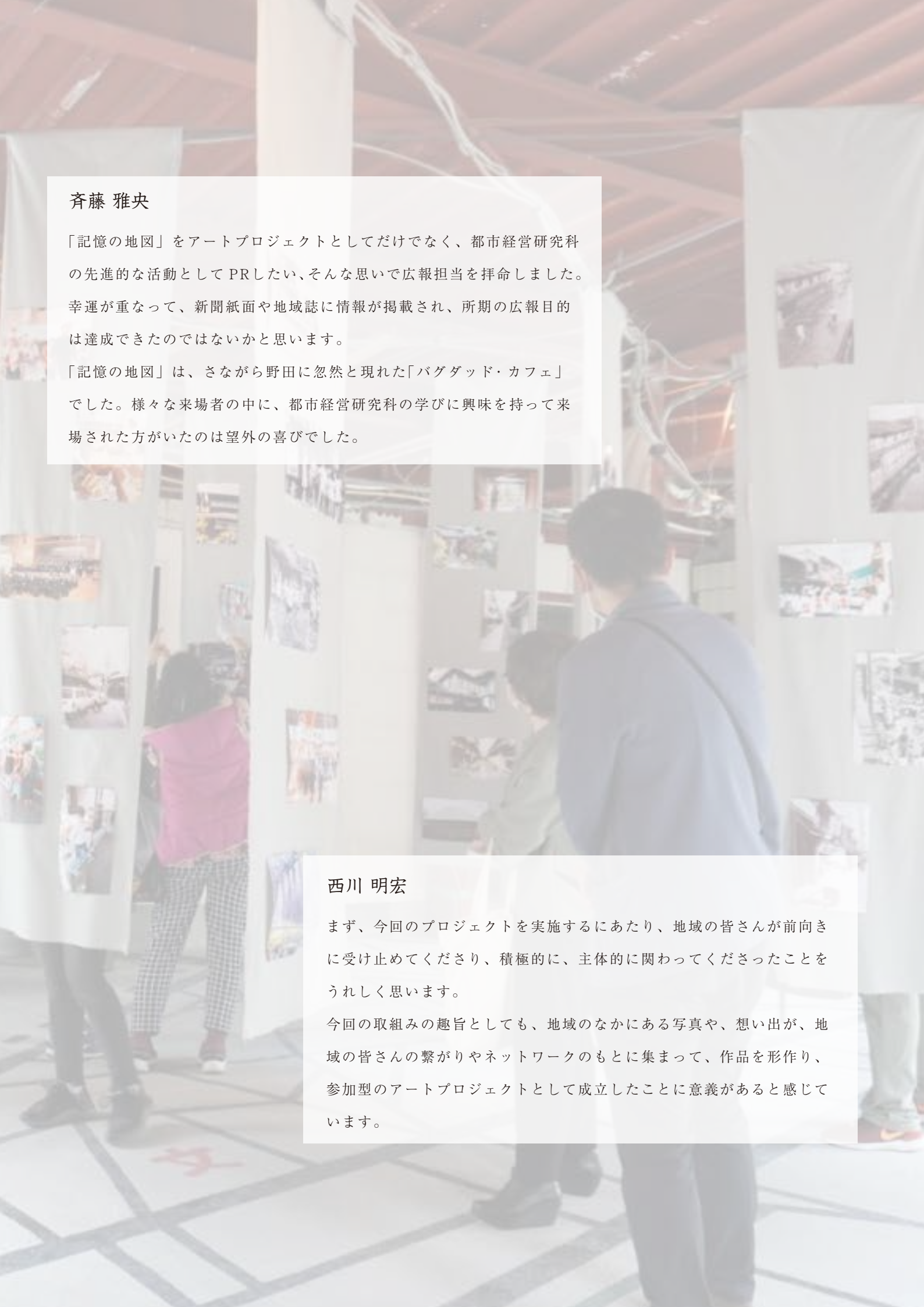
コメント

榊原 節子（榊原節子建築研究所）

このプロジェクトを企画した段階では、実施できるか不安がありましたが、仲間それぞれが社会人経験を発揮することに加え、地域の方々が、私たち以上に熱意をもって後押しをしてくださったことで、当初の想像以上のプロジェクトとして実現することができました。
建築設計に携わる上で、いつも建物のある場所性には意識をしていますが、このプロジェクトを通して、街中を歩き暮らす方の生の声を聴くことで、地域と建物、そして新たな住まい手との関係について、深く思考を巡らす機会となりました。また改修中の現場に展示することで、改修前と改修後の時間軸を意識し、設計者として新たな視座を持つことができました。

阪本 なつよ

とっても野田地域の皆様の心が温かい。短期間のアートプロジェクト『記憶の地図』でしたが、地域の皆様と心が通じ合うのに時間は必要なかったです。初めて出会ったその瞬間から色んなお話で盛り上がりました。『まちづくり』って人と人がつながっていくことだと思います。社会人大学院生ならではの素晴らしいネットワークを活用できたからこそ実現したプロジェクトは、私達の心にも深く刻まれ今後の学びへの良い経験になりました。



斉藤 雅央

「記憶の地図」をアートプロジェクトとしてだけでなく、都市経営研究科の先進的な活動としてPRしたい、そんな思いで広報担当を拝命しました。幸運が重なって、新聞紙面や地域誌に情報が掲載され、所期の広報目的は達成できたのではないかと思います。

「記憶の地図」は、さながら野田に忽然と現れた「バグダッド・カフェ」でした。様々な来場者の中に、都市経営研究科の学びに興味を持って来場された方がいたのは望外の喜びでした。

西川 明宏

まず、今回のプロジェクトを実施するにあたり、地域の皆さんが前向きに受け止めてくださり、積極的に、主体的に関わってくださったことをうれしく思います。

今回の取組みの趣旨としても、地域のなかにある写真や、想い出が、地域の皆さんの繋がりやネットワークのもとに集まって、作品を形作り、参加型のアートプロジェクトとして成立したことに意義があると感じています。

榊原 節子 × 鈴木会長

「記憶の地図」アートプロジェクトを振り返って

聞き手　金崎 亮太

鈴木会長：　こういうプロジェクトをやりたいって人がいあるんやけど会ってくれって役所の方から連絡があったのが最初やね。
会って、西川さんがみんなの前で説明しはってね。普通イベントって半年街前から準備するんやけど、2ヶ月もなかったから申し訳ないけど写真が集まるんかなと。申し訳ないけどこれは無理って思ってた。

榊原：　やっぱり無理やでって思ってたんですね。

金崎：　写真が集まり出したキッカケのようなものはなんだったんでしょうか？

鈴木会長：そらもう回覧板やね。せっかくやし言うて。それを見て持ってこられた人も現実にあったそうやね。

榊原：　見ましたよって言う人もいました。

鈴木会長：この人やったら持ってくるなって人が持ってきてたね、やっぱり。

金崎：　回覧板が生きてるってのがすごいですね。自分が住んでいるところにはないです。

鈴木会長：　時代やな、それは。回覧板回してもポンとハンコを押して右から左へ流す人もおるからね。それもあるけど、ポスターも効いたんとちがうなかな。各町会に掲示板があるからね、それを見てもってこられたかもわからん。

金崎：　榊原さんも最初は写真が集まるかなと不安でしたか？

榊原：　すごいそれは心配でしたね。たまたま同じ大学院の方に大阪市役所の西川さんがいてたのでルートがあったから良かったですけど。もし彼のルートがなかったらどういう風に町内会の方々に写真集めをお願いしていいのかすらもわからなかったので。

鈴木会長：　回覧板回すぐらいは別に誰に迷惑かけるわけないし、簡単なことだけど、それも、あって。300人も来たってのは広報もされたからやと思うよ。読売新聞の取材がきたり、ネットでも発信されたから。そういった色々なことがあったからやと思うよ。

金崎：　取り組みの途中で鈴木会長が参加されてから一気に動き出しましたよね。

榊原：　それはありましたね、絶対に。

鈴木会長：　そういうの、嫌いじゃないからね。昔からそういうのん好きで、久しぶりに楽しいことできるかなと思って、私ももう大変やけど写真集めたらまたもっと集まってみたいやったね。まず写真がなかったらできない話やったからね。

榊原：　そうですね。その写真が集まりそうで良かったなと思ったのは、やっぱ一番最初の写真集めをしたのが2月の中旬でした。あの時にある程度持ってきてくださった方がいたのと、あのずっと(鈴木会長が)現場にいてくださっていて、行き来する人に声かけてくれ、それで持ってくるわっていう人がいたので。

鈴木会長：　私も逆に見たことない写真も見れてね、はっきり言って。

榊原：　第2室戸台風の時の写真ととか。

鈴木会長：　そうそう。意味貴重な写真を見れたなって。

金崎：　300人お越しいただいた方も野田の昔の姿を見たことなかったり、この光景を見たことないっていうような人がたくさんいましたよね。

鈴木会長：　そうそうそう、小さい時にこんなんあったなって思い出した人もいるんだよね。

金崎：　僕も現場にそんな長い時間入れなかったんですけど、結構昔話とか思い出話をされたりとか、子供に昔の話を伝えたりとか。

榊原：　そうですね。

金崎：　1人でじっと見るというよりかは、そこでいろんな話がされてたイメージがありますね。

鈴木会長：　写真集みたいものはね1人で、はい、うんってなってますけど、小学校の同級生とかは展示と離れて同窓会的な人も何人かいたしね。「今どないしてんねん？」とかいう話もチラチラ耳に入ってたり、うん、よかったと思うよ。

金崎：プロジェクトやってみてそういう人の繋がりが生まれたり、また改めて接点ができたりとかっていうとこが大きかったんですか？
鈴木会長：　大きかったと思う。2日ではもったいないって思うくらい良かったと。
榊原：　2日だから良かったのかもしれませんね。来れる人が来れて。
鈴木会長：　天気も良かったしね。ところで、コーヒーは飲んでくれてたんかな？(展示会場にて地元の方がコーヒーを販売)
榊原：　結構飲んでたんじゃないかな。椅子を置いてくださったんで、やっぱろ椅子があるのとないと全然違ってたなって思ってます。座れるからちょっと休んでいこうかっていう感じで。
鈴木会長：　ちょっと話変わるけど、こないだ野田で桜まつりを3年ぶりにやったけど、あれは1日のイベントやったけど300人ぐらい来てたな。関東炊きやフランクフルトもよう売れてたし。話しちゃうけど､やっぱりみんな待ちに待ってたんじゃないかな。これまでやっぱしずっと家に行ったりして、なかなかなかったし。集まる機会ってなかなか取れなかったから、今回のイベントでもみんなが来てたんかもね。
榊原:　あれだけ滞在時間が長く色々な人が来て、ずっとお話されているので、あれだけ来られた方々が長時間滞在してるプロジェクトって珍しいんじゃないみたいなことを本当に言われています。

金崎：　榊原さんは本当に大変な思いもあったかと思いますが、やってみてどうでしたか？
榊原：　一番最初に不安だったのは写真が集まるかどうかですね。途中で集まりそうだなっていうふうに思って、その点は解消したので、次に展示をどうするのかとか、何かその辺でスタッフも入れて試行錯誤してできたからよかったなと思います。
鈴木会長：布での展示が良かったね。両面から見えますもんね。
榊原：　私的にはあそこに住んでた方のお母さんと、今度住まれる方があそこの場所でずっとお話されていて。

鈴木会長:　普通ないことやな。手放したはいさようならってなるから､なかなかないよね。今度住む人と元住んだ人が話をする機会って。
榊原：　リノベーションって新しい人に引き継ぐ行為でもあるので、そういう機会が起こったのはすごい良かったんじゃないかな。それが一番良かった良かったのかなとか思います。
鈴木会長：　床面の地図を描くのは大変やったんちゃうのん？防護服みたいなん着て。
榊原:　テープが付くかなって思ってたんですが、付かなかったから描くことにしました。現場の方に描いていいかっていう確認をして、お施主さんにはその時には聞かなかったんですけど、終わってから残して欲しいと言われています。
金崎：　このプロジェクトを通して野田をいう町を改めてどう思いいましたか？
鈴木会長：　やっぱり中央市場の町やなと。日付が変わるか変わらんかくらいから仕事してるから、中央市場があって、周りに住み着かないとおれないとこですわ。必然的に中央市場があって、周りに住むとこがあるのが野田です。
金崎：　住むってのと働くってのがワンセットになってるんですね。
鈴木会長：　そう、だから今でも中央市場に関わってる人がようさんおるしね。世代が変わってしばらく(野田から)離れてても、継ぐ子はまた近くのマンションに戻ってくるしね。もちろん車で来る子もおるけど。
榊原：朝早いですもんね。
鈴木会長：　早いです。水曜日は定休日やけど、平日の朝とでは全く風景が違う。ターレットがガタガタ走るし、そんな静かな町ではない。その分安心な町やね。みんなが一斉に寝るわけじゃないから。

金崎：　交代制で誰かが起きてるってことですね。
鈴木会長：　それでも寂れたんですよ。一番メインストリートの大野町通りというのが賑やかな商店街でしたんですけどね。両側に店がずっとあったわけやから。下駄屋から畳屋からいっぱいあったわけやから。それが今は普通のお家になってるもんね。必然的に商店街ってそういうのあるんやと思うねんけど。
金崎：　新しく若い人が来て、お店を始めるとかそういうことあるんですか？
鈴木会長：　野田ではあんまりないね。中崎とかは若い人がウロウロできるような地域やから、古い建物でお店したりできるけど。
榊原：　野田も何か一つきっかけがあれば。
鈴木会長：　やってくださいよ。建物をリノベーションしてね。
榊原：　長屋は結構残ってますよね。野田はすごい残ってる町だなって。
鈴木会長：　でもやっぱし建て直してプチプチ切れていってるからね。耐震性はなくなってるな。もう普通やったら6軒でもあれば地震でも耐えたが、ポツンといったらもうこっちは2軒3軒とかになったら耐えられんようになってるね。だから今の耐震条件には合わないよね。

榊原：　古くから住んでる人がとても多いとこだなっている印象ですね。中央市場があるから、ここで代々お商売をされている方も多いんでしょうね。昼間にぷらぷらしている人もけっこういて、何してる方なんだろと思っていたら中央市場で働かれてる方だったりとかもしますね。あと、野田はやっぱりあれですよね。(戦争で)焼けてないので、すごい古いものが残ってるんだなっていうのをちょっと改めて思ったのと、区画が昔のままですよね。

鈴木会長：　昔の水路がそのまま道になってるからね。

榊原：　最初はめっちゃ迷いました。自分がどこを歩いているのか分からなくなる。

鈴木会長：　昔の水路図と、今の地図を照らし合わせると、この道が昔は水路やったんやなってわかる。その方が手っ取り早かったんやろねえ、埋めたら道になるから。

金崎：　またこういう機会があればっていう思いはありますか？

鈴木会長：　私が中心でやる力はないけど、お手伝いできる場合は出来る限りのことは。

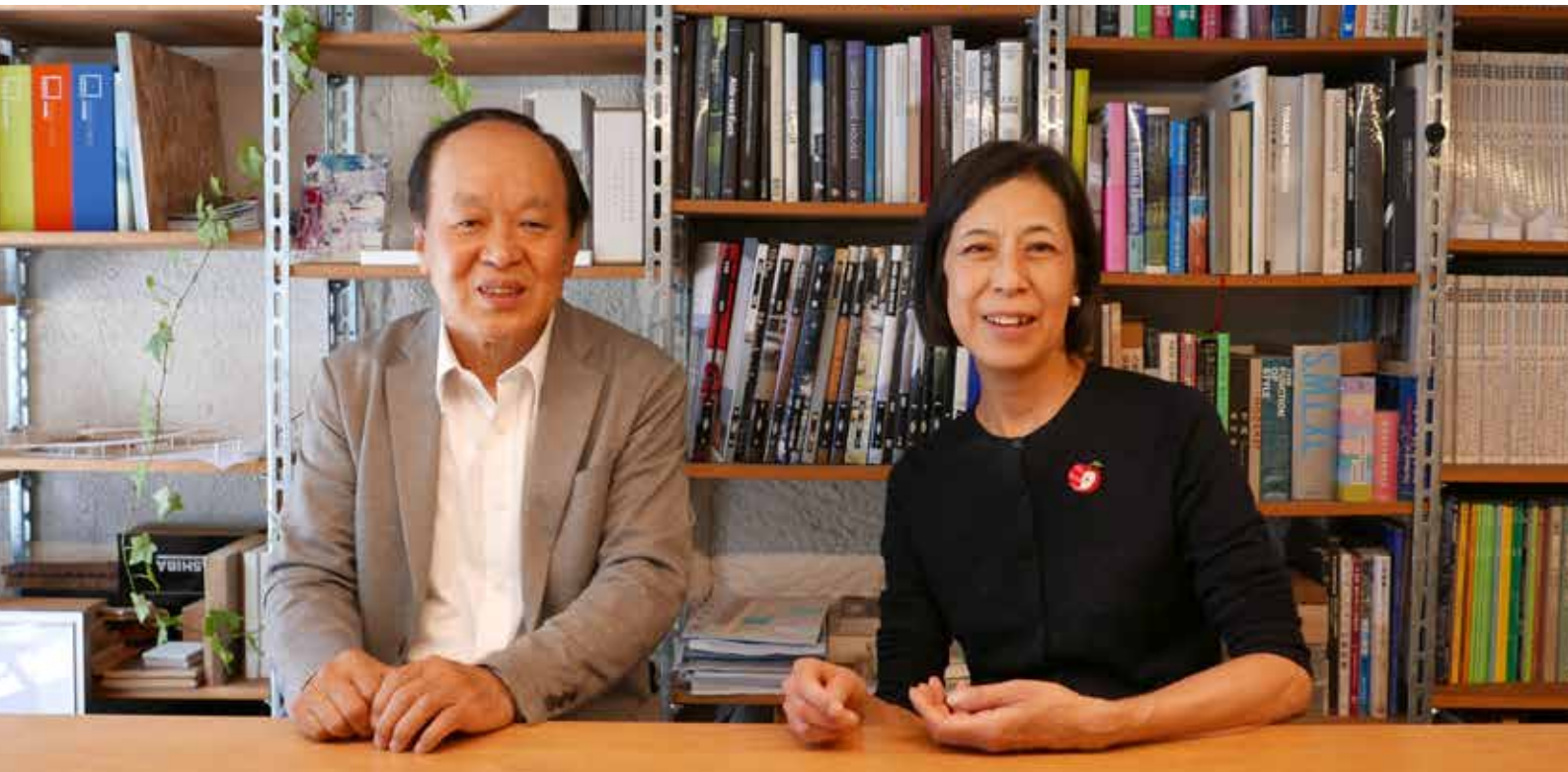
榊原：　これは私の事務所だけではできなくて、やっぱり大学院の皆さんが色々な役割分担をしたから出来たんだと思うんですよ。例えば後方の斉藤さんもですし、本当に西川さんがいなければそもそもの接点が生まれなかったですし。これを1設計事務所という立場だけではこういう風にできなかったはずです。そういう意味では皆さんそれぞれの個性が発揮されて良かったんじゃないかなって思います。

鈴木会長：　我々も何年か前に「ナ・イス祭」ってのをやったときもやっぱし、メンバーに大学の講師がおって大学生呼んでいただいたからね。だから、やっぱり若い力が必要やろうね、何するにしても。年寄りが多いからね。野田は福島区でも一番。高齢社会のまだ上の超高齢社会。何でかって昔から中央市場の関係で住みついている人が多いから年齢もどんどん当然高くなって、超高齢社会やと思います。

榊原：　私達の仕事からいうと、イノベーションって昔よりは多くなったんですけど、改修前改修後みたいな考え方というか、そういう視点でしか見てなかったところがあるんです。それを改修前と改修後の途中にある改修過程みたいなものを一つの記憶というか、留めることができたら良いなっていうふうに、ちょっとその時に思いまして。今回ああいう工事状況の中で、人が来れる場所を作ったっていうのは、設計の一つのプロセスとしては良かったのかなっていうふうには思ってます。

野田ナ・イス祭：　https://www.noda-na-noda.net/naisu

(インタビュー日：　2023年4月吉日)



会場風景

アートプロジェクト

記憶の地図

archive